

映画に魅せられて

吉澤 宙彦 (高46回)

「映画に出たい」

私は東京で役者をしています。

2022年11月8日、一本の電話からこの物語が始まります。「フランスにいる映画監督の平井敦士さんからオーディションのオファーがありますが」。事務所からでした。

一体誰だろう？ 思考が止まりました。フランス、映画監督、平井敦士。ネットで前作「フレネルの光」の予告編を観たとき自分の作りたい映画だと直感しました。ガラス越しに覗く男の姿が自然の風景に溶け込み、そこに流れる空気を映し出していました。30年来漠然と思いつづけていた映画がここにありました。

この人の映画に出てみたい。

た。覚えているのは合格発表のあとひとり銀座で珈琲を飲んだこと。俺は役者になったんだとしみじみかみしめた瞬間でした。

それから20年間舞台を中心に活動してきましたが、頭の片隅にはいつも映画がありました。人生の指南役でもあるショーン・ペンの存在も大きかったと思います。もし撮るとしたら何を撮りたいか？ 自分のルーツである喬木村伊久間、年老いてゆく両親、ただ映画の技術も知識もない自分は帰郷のたびにカメラを持って周りの風景をフィルムに残していました。

「出会い」

話は冒頭へ。突然平井さんが私の前に現れたのです。本当に不思議です。台本をみると中年の男が何十年ぶりに実家に帰り銭湯へ入るというもの。電話の2日前、実際に帰郷して温泉にも入っていました。全てが繋がっていました。はじめてお会いする平井さんはとても丁寧で誠実な人柄。喫茶店に入り開口一番この偶然を話しました。3日後「一緒にお風呂に入りませんか」と電話が。どんな気持ちでいいのかわからないまま2人で上野にある銭湯に入り、その日は終わりました。別れ際この映画をカンヌに持っていきたいと聞いたとき、この人だった



●よしざわ・おきひこ
喬木村伊久間出身。飯田高校では本多勝一に憧れて山岳班に所属。立命館大学文学部卒業。東京の円（えん）研究所に入り、2003年演劇集団円の会員に昇格。現在に至る。

「ルーツ」

飯田高校で選んだのは山岳班。私の原点です。そこで出会った仲間とあらゆることを議論しました。班室や風越山のキャンプで何時間も何時間も話しつづけました。ここでの体験が今につながっています。

そんな高校2年の春、ある映画に衝撃を受け、初めて役者を意識しました。そこから京都の大学に入学。2回生のとき自分は何をしたいか考えた結果、演劇を選ぶことにしました。もしそこで映画の道に進んでいたら監督を目指していたかも知れません。人生は不思議です。

卒業しても就職する気はなく、両親に30までには何とかすると伝えました。たまたまそのとき募集していた円演劇研究所に入ることができ東京へ。28の春、演劇集団円に昇格してプロと呼ばれる世界に入ることができました

らいくのではとぼんやり感じました。もはや結果はどうでもよく、幸せな時間を共にした平井さんへの感謝の気持ちでいっぱいでした。

「この映画を吉澤さんで撮りたい。吉澤さんの魅力を撮りたい」。平井さんのこの一言で映画「ゆ」（日仏合作）の出演が決まりました。なぜフランスにいる平井さんが自分に辿りついたのか？ 今考えても運命としか言いようのないものでした。半年ほど前から地元富山で主演を探すが見つからず、タレント名鑑でも見つからず、ふと東京の下北を検索したところ円のホームページにつながり、私の写真に目が止まったとのことでした。曰く「笑っているのか泣いているのかわからない顔」。数年前に撮った一枚の写真が私の人生を大きく変えることに（プロフィルの写真がそれです）。嘘みたいな本当のお話です。一つでもボタンがかけ違っていたならこの物語は始まりませんでした。

「映画を作る」

富山での2週間は人生最高の時間でした。私を含め総勢9人のクルーは外国人スタッフもいて、日本語、英語、仏語が飛び交う小さなコスモポリタンでした。撮影時間以外は大部屋で宴会が始まるなどまるで修学旅行に来て

自分は特別な人間ではありません。たまたま「そこ」にいただけです。人生に勝ちも負けもありません。やるかやらないか。

男優賞の知らせに震えが止まりませんでした。そしてなんと信じられないことに、来年のアカデミー賞短編部門ノミネート候補作品に。

全てが奇跡の連続だったこの一年。世界のどこかで今もこの映画が上演されている現実。ああ、世界はなんて近いんだ！



映画「ゆ」のポスター

「物語はつづく」

映画「ゆ」は、夏に念願の飯田センゲキシネマズで上映。世界の国際映画祭で6つのグランプリを含む17の賞を頂きました。その中の一つ、フランスTVからの最優秀男優賞の知らせに震えが止まりませんでした。そしてなんと信じられないことに、来年のアカデミー賞短編部門ノミネート候補作品に。

全てが奇跡の連続だったこの一年。世界のどこかで今もこの映画が上演されている現実。ああ、世界はなんて近いんだ！

撮影は独特でした。スタートの掛け声はなく、手をあげてから3秒待つてはじめてくださいとのこと。一応台本はありましたが現場では流れの中で会話をしました。湯船に腰掛け油断している姿を撮られていることも。演技指導はほとんどありません。あるシーンで平井さんが何を撮ろうとしているのかわかった瞬間がありました。全ての起こりうる条件の中で偶然が引き起こす「永遠の一瞬」を捉えたい。カメラのなかできらめく肉体、水面を通して浮かび上がるライティング。その鼓動。「永遠の一瞬」は完璧な永遠がないという前提において未完で終わることを知りながら、だからこそ平井さんはそれを求めて映画を撮りつづけるんだ。

いる気分、そこで映画を作るとは自由になることだと学びました。自由な映画はあたたかさやわらかさを持ち、共感をもたらしてくれます。一瞬で国や人種を飛び越え人々を結びつけてくれます。普段いかに己を殺して生きてきたか。束縛しているのは自分自身なんだと痛感しました。

「カンヌへ」

この作品は第76回カンヌ国際映画祭監督週間部門に正式に招待されました。世界の巨匠ルーク・カス・スコッセン・大島渚・北野武」を輩出した部門で映画の歴史に名前が刻まれることに。実はカンヌが始まるギリギリまで平井さんはフランスのスタジオにこもって編集をしていたそうです。文字通り命を削って作った映画は21分。平井さんが絶賛したシーンは全てカット。映画にとって必要なければ容赦なく切り取られていました。一秒一秒に魂を込めて作る姿勢に映画の真髄をみた気がしました。

5月のカンヌは気持ちのいい晴天でした。告白します。世界中の映画関係者が集まるカンヌはあらゆる人間の欲望の象徴でもあり、3日待たずして帰りたいくなりました。映画をゼロから地道に作る人がいて、それを莫大な金で取引する人がいて、2つが混沌と同じ世界に存在する場所。私にとってカンヌの水は少々苦いものでした。

いか。大事なことは目の前にあること。耳を澄まして心の声を聴くこと。観察すること。人と比べることをやめ、できないことは諦め、欲を捨て、それでも残ったものが人生。今、私はそう思います。

物語はまだまだつづきそうです。